

3章 保育の工夫～子ども主体～

3章では、子どもたちの「科学する心」の育ちを支える「保育の工夫」に注目した実践をご紹介します。

各園が、コロナ禍はもとより、子どもの実態や園の実情などを踏まえ、保育について試行錯誤しながらも、常に子どもの主体性を念頭に置いて工夫につなげています。また、「科学する心」を育むために、子どもの興味・関心に基づき、子どもの着想や発想がより膨らむような環境を構成したり、保育の工夫をしたりしています。さらに、ICTの活用や子ども同士の振り返りの場や保護者との連携の工夫により、もの・こと・自然との関わりが広がり深まり、子どもたちの体験がより豊かに展開していることが読み取れます。

さらに、保育の質の向上には、ご紹介の実践の様に、日々の子どもの姿や育ち、日々の記録などを基に園内で語り合い、振り返ったことを、次の保育に活かす取り組みが重要なことが読み取れます。

実践6：「発見が溢れている豊かな環境って？」(2歳児)

京都市楽只保育所

子どもたちが、全身で泥水に関わったり、植物の生長に驚いたりなど瑞々しい感性を発揮している姿に注目しています。保育者が日頃から、「保育を語り合う」文化により、子どもの実像を的確に捉え、考察を深めて、保育の工夫につなげています。

子どもと保育者との間に生まれる心の動きや、子どもたちが発見したことに目を向けた環境作りは、子どもたちの経験の豊かさにつながっています。豊かな感性を育むために大切な保育者の関わりが伝わってきます。



実践7：「雨って面白い」(3～5歳児)

(福)照治福祉会 阿武山たつの子認定こども園



「雨って面白い」「雨と水道水との違いがあるの?」「雨水の水泡の感触は?」子どもたちの取り組みは広がります。コロナ禍の自粛登園の中、家庭と園それぞれで過ごす子ども同士の共有を目的に始めた雨の量調べが契機となりました。保育の工夫と子どもたちの興味と人間関係が相まって、雨水の探究へ…。一人の子どもの気づきや疑問が友達や異年齢児に広がり、共に考え合ったり、情報共有したりする姿、そこからさらなる発見が生まれていく過程に「科学する心」の育ちが読み取れます。

実践8：「タイムラプスの動画で配信」(4歳児)

京都市立明德幼稚園

子どもが、オクラの生長に興味・関心をもち、思いを寄せていく姿、心の揺らぎに注目しています。オクラの生長をタイムラプス動画で家庭に配信するICT活用の工夫は、親子でオクラへの思いを共有するきっかけとなりました。また、子どもたちが、対象物への愛情を深めていくきっかけともなりました。記録による記述とフローチャートの二重の描写による細やかな分析・考察によって、子どもの内面を深く読み取ることから、園独自の「科学する心を育てる」保育につなげています。



実践9：「雨の水って飲めるのかな?」(5歳児)

(福)檸檬会 レイモンド新三郷保育園



「雨の水って飲めるのかな?」という子どもたちからの問いが、友達や保育者、保護者も関わっていく中で、様々に試行錯誤を重ねる活動に展開し、探究が深まっていく実践です。子どもの思いに添った保育者の関わりや友達同士の共有の場が、一人一人の自信や意欲につながっています。また、活動の様子を、ドキュメンテーションによって発信することで家庭をも巻き込み、子どもたちには、新たな問いや試しが生まれます。保育の発信と共有による保護者を巻き込む保育の工夫は、子どもの体験の広がりや深まりをもたらしています。

実践10：「自ら環境に働きかけ主体的に遊ぶ」(4～5歳児)

大津市立伊香立・真野北幼稚園

“なぞの石を取り出す子どもたち”“砂場の水流して思いがぶつかり合う子どもたち、”それぞれの事例で、一人一人の思いに寄り添う保育者。同じ遊びをしても、それぞれ楽しんでいることは違うとの視点を持ち、その子どもならではの楽しみを見つけられるように、一人一人の立場に立って保育を振り返っています。記録を基にした保育者同士の語り合いを、子どもたちの興味あることから遊びを展開していくような保育の工夫につなげることで、子どもたちの主体性が育まれています。

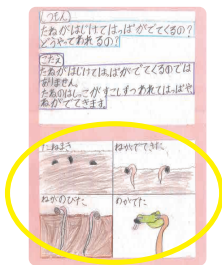


* 他の実践に見られる保育の工夫 *

他の園の実践に見られる、「保育の工夫」をご紹介します。学校や家庭との連携の工夫が、子どもたちの対象への興味を広げたり深めたりする契機となり、「科学する心」につながる体験が豊かに展開していることが伝わってきます。

小学校との連携～学びのつながり～

(福)愛育福祉会 幼保連携型認定こども園 こばと保育園



- ・4歳児の子どもたちが、**アサガオを育てている過程で、問いが生まれた**。そこで、小学校に手紙で相談することになった。担当教諭からは、2年生が返事の作成を担当したことに加え、普段は授業や校外学習で「教えてもらう」場面が多い小学生にとって、「保育園からの質問に答える」という活動は初めてであり、とても貴重な経験となったことが添えられていた。
- ・4歳児からの手紙を読み、最初は「難しいな」と感じていた**2年生が、自ら図書室でアサガオに関する本を借り、子どもたちの発案でグループごとに質問を割り振って調べ学習をしていった様子**が報告されていた。子どもの**ふとした疑問が、このような小学生の深い学びへ広がっていった**ことに驚くと同時に、子どもたちの問いに真摯に向き合っていた小学校の皆様の温かな思いを受け取ることができた。このことから、子どもたちは、**問いを共に追究する友達との対話も増え、さらにアサガオへの興味を深めた**。

小学校との連携～テレビ会議システムで一年生と交流～

京都市立楊梅幼稚園

- ・テレビ会議システムを利用した一年生との毎日の交流が当たり前となってきた。一日のスケジュール表には「いちねんせいとてれびであおう」と表記。子どもたちも「今日は朝するのか」「今日は帰る前だね」と、1年生とテレビを通してつながることが特別ではなく、自然な活動の一部となっていた。
- ・テレビにK先生が映る。「あ、K先生!」とAさん。先生の名前も覚えた。K先生が、「あお組の皆さん、おはようございます」と言うと、「おはようございます」と声を揃えて応える。K先生が「今、生活科の授業で、ハッピーランドを作っていますよ」と言うと、1年生が「これはドングリはじきです」と言いながらドングリをはじいて飛ばす。「ウフ、凄い!」と真剣に、憧れのまなざしで画面を見つめる**子どもたちは、興味津々な様子で質問をし合うなどのやりとりを楽しんだ**。交流後、子どもたちは「早く作りたい!」との思いになった。
- ・新型コロナウイルスによる状況下で、**直接触れ合うことが難しくても、心のつながりを大事にしていけば、幼小の交流活動でできることはあり、子どもたちの育ちを図っていくことはできる**。今できることを園と小学校の教師が一緒に考えて、試行錯誤しながら実践していくことが、今後につながると考えている。



家庭と園生活をつなぐ～コロナ禍での取り組み～

札幌市立手稲中央幼稚園

- ・新学期開始 4 日間の登園後まだ先の見えない休園が始まった。採集してきたオタマジャクシの卵は、暖房を使用していたため、次々に孵りオタマジャクシになった。さらに休園延長が決定し、カエルに変態するところを園で観察するのは困難と判断し、飼育希望の家庭を募った。**初めての飼育に不安な保護者もいたため、子どもたちのつぶやきや親子の観察記録を、学級で共有できるようにと、観察シートを渡した**。
- ・6月、園が再開すると、**学級のカエルやオタマジャクシを見ながら、「竹輪はよく食べる」「家の子はもう足が生えている」「カエルになった」などオタマジャクシの好きなもの、変態したことをみんなで共有した**。親子で描いた記録を見ると、**好きな食べ物、生活、体の色が家庭によって違っていることに気づき、「同じ卵から生まれたのに、なんで違うのかな?」**と子どもたちは、つぶやいていた。カエルになったから採集してきた場所に放したいと採取場所の問い合わせもあり、**育ったカエルを愛おしく思い、親子で面白がりながら、変化にワクワクする経験**になった。シートは大きな紙に貼り、子どもも保護者も見合えるように掲示した。



観察シート

自粛期間中にオタマジャクシを7匹育てました。最初にかエルになった1匹が死んでしまい、埋めようと庭先に置いていたら、数分の間に鳥にさらわれたのか、いなくなっていました。死んでしまったこと、いなくなってしまったことに、ショックを受けたようでしたが、「ドキュメンタリーだねえ。」と繰り返し自然界の命の流れに感じ入っていました。「元々蟻やハエすら怖がるくらい虫嫌いでしたが、オタマジャクシを育てている時は、「餌にする。」とかエルに持って行ってあげたために、蚊を捕まえると言ったりして驚かされました。

保護者からの感想